

比較文化Ⅱ [第12回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●カラーシャの祭りと音楽

▼カラーシャの祭り

カラーシャの社会では、1年を通してさまざまな宗教行事がおこなわれる

のべにして年間約90日ていど、何らかの歌や踊りを伴う祭りや儀礼が開催される

つまり1年のうちの1/4以上の日が音楽に費やされるといっていい

祭り名	期間	内容	歌・踊りの種類
カガーヤック	1月初旬（1晩）	カラスの祭り（豆まき）	祈り歌・手拍子歌
カンバウーチャック	1月初旬（1日）	雛祭り	手拍子歌
キラサーラス★	4月中旬（1日1晩）	農耕の開始を告げる 早春の祭り	（歌・踊りはない）
ジョシ★	5月中旬（4日）	牧畜の開始を祝う 春の大祭	3つの踊り歌・ジョシの歌・遊び歌
ムラッチワキジョシ	5月中旬（1日）	家畜を放牧地へ上げる 初夏の祭り	3つの踊り歌・ジョシの歌・遊び歌
ラットナット	7月中旬～8月中旬 （約1月）	夏の夜踊り	3つの踊り歌
ウチャオ★	8月中旬（1晩）	家畜と農耕の豊饒を 感謝する収穫祭	3つの踊り歌
サリアック	11～12月（1晩）	結婚披露宴	3つの踊り歌・手拍子歌（結婚式の歌）・笛
アラシンジオーンタ	11～12月（1晩）	略式結婚披露宴	手拍子歌（結婚式の歌）・笛
ドゥールニウェイシ	11～12月（1晩）	新築披露宴	手拍子歌（チョウモスの予告）・笛
チョウモス★	12月中旬（14日）	冬の大祭	チョウモスの祈り歌・手拍子歌
ダウタトゥー	12月下旬（1日）	豆祭り（門付け）	祈り歌・手拍子歌
カファギ	随時（1～3日間）	葬儀	3つの踊り歌

ムンムレット谷の場合。★は季節の変わり目にある四大祭り

冬→春：キラサーラス／春→夏：ジョシ／夏→秋：ウチャオ／秋→冬：チョウモス

▼祭りと音楽

祭りの進行上、音楽が儀礼と並んで非常に重要な役割を果たしている

単なる娯楽・芸能として歌や踊りが演じられるのではない

●冬の大祭・チョウモス

▼チョウモスとは

毎年12月に2週間にわたっておこなわれるカラーシャ最大の聖なる祭り

その最終日が冬至の日に重なるよう、12月9日から開始（年によってずれる）

大きく「前半部」と「後半部」に分かれる

さまざまな民俗神を迎えて家畜や農作物の豊饒を祈願する前半部

浄化儀礼をし、バリマインという強力な神を迎えて儀礼をおこなう後半部

後半部では、部外者（他の谷のカラーシャも含む）は村に留まることは許されない

聖なる儀礼が次々と続き、カラーシャとしてのアイデンティティが確認される

二元的な世界観（二項対立）が社会的に最も強く意識される

聖／俗（穢れ）、男／女、大人／子ども、神／人、野生／家畜

西／東、ツィアム（故地）／ムンムレット（現住地）、山／村（谷）、上／下

家畜小屋／家、渾沌／秩序

●チョウモス祭とクリスマスとの類似点

▼西アジア～ヨーロッパに広まっていた「冬至の祭り」

カラーシャ語「Chowmos」、コワール語「Chitrimas」→英語「Christmas」

クリスマスとは、キリスト（Christ）のミサ（missa = mass）の意味

しかし、かなり「異教的」な要素に満ちているため、快く思わない人もいる

ローマ帝国に普及したミトラス教のサトゥルナリア祭＋ゲルマンのユール祭の痕跡

犠牲の家畜を捧げ、常緑樹を飾り、男女の役割転換とどんちゃん騒ぎがあり、たいまつを燃やし、歌を歌いながら門付けをする

ミトラス教（ミトラ教）は小アジア（シリアやトルコ）起源の宗教（多神教）

ゾロアスター教の神ミトラが主神 → インドでは弥勒菩薩に

ローマ帝国に持ちこまれ、信者を増やす → ローマ皇帝も儀礼に参加

キリスト教がヨーロッパに入っていくとき、民衆のあいだで人気のあった「冬至の祭り」を、キリスト教のなかに取り込んだ

ミトラス教の祝日 Natalis Solis Invicti（不滅の太陽の生誕日）である12月25日がキリストの誕生日として解釈され制度化

●チョウモス祭の日程

日程		行事名	行事の内容	歌の種類
8日	前日午後	バンデン	祭り開始の触れ回り	
祭りの前段				
9日	1日目午後～夜	小サラザーリ	山の神迎え（煙り合戦・門付け）	祈り歌・手拍子歌
10日	2日目午後～夜	大サラザーリ	山の神迎え（煙り合戦・門付け）	祈り歌・手拍子歌
11日	3日目早朝	ドライコット	かご燃やし（子孫繁栄祈願）	手拍子歌
11～12日	3～4日目	ゴシュサーラス	家畜小屋浄め	
13日	5日目午後	チュイナーリ	家畜の神迎え（外来神と地母神の結婚）	祈り歌・手拍子歌
14日	6日目朝・夜	クッタムルー	お絵描き（墨） 小動物づくり（パン）	
15日	7日目早朝	タトレック	家畜の神送り（小動物壊し）	手拍子歌
	7日目夕	マンダイック	祖霊祭	
移行期				
15日	7日目夜	マンダイックラット	聖なる歌と踊りの解禁	祈り歌・手拍子歌・踊り歌
16～17日	8～9日目	クルヒスティ	供物捨て（村浄め）	
祭りのクライマックス				
18日	10日目昼	シシャウ	女の浄化儀礼（聖なるパンの儀礼）	
	10日目夜	イストンガス	男の浄化儀礼（犠牲の血を浴びる儀礼）	
18～19日	10～11日目	ゴシュニックアウ	通過儀礼のパンづくり	祈り歌・手拍子歌・踊り歌
19日	11日目朝	ゴシュニック	通過儀礼（成年式）	手拍子歌
	11日目夕	インドラスシシャウ	聖なるパンづくり	祈り歌
	11日目夜	プーショウ	犠牲祭	祈り歌
20日	12日目朝	グローニャック	かご編み競争	祈り歌・手拍子歌
	12日目夕	インドラスシシャウ	聖なるパンづくり	祈り歌
	12日目夜	チャンジャ	神との交感儀礼（男・聖域）	手拍子歌
	12日目夜	チャンジャ	歌と踊り（女・村）	祈り歌・手拍子歌・踊り歌
	12日目深夜	チャンジャ	秘儀（聖域での儀礼）	祈り歌・手拍子歌・踊り歌
移行期				
21日	13日目早朝	ナンガイロー	神送りの儀礼（聖域→村）	祈り歌・踊り歌
	13日目朝	チュタック	乱痴気騒ぎ	手拍子歌
	13日目夕	アマタクサーラス	俗戻りの儀礼	
祭りの終演				
22日	14日目	ラワックピーク	カーニバル（キツネ追い→仮装踊り）	手拍子歌

上記はムンムレット谷の場合。他の谷では違う式次第となっている。

●チョウモスの歌

▼行事に沿って100曲以上の歌がうたわれる

チョウモスの歌のほとんどは、チョウモスの期間だけうたうことが許されている特別な“聖なる歌”である

▼以下の3種類に分類できる

- 祈り歌
- 手拍子歌
- 踊り歌

▼聖なる度合に応じて、歌っていい（歌われる）時期が決まっている

- チョウモス祭が始まったら歌ってもいいもの
- 前段の民俗神迎えが終わったら歌っていいもの
- 犠牲祭に向けて家畜小屋でパンを作りながら歌うもの
（1年に2度だけうたう。女性やよそ者は耳にはいけない）
- 聖域でのみ歌うもの
（1年に1度だけうたう。絶対に秘密。歌詞を普段思い出してもいけない）

▼楽器は伴わず、歌だけ

カラーシャの代表的なパフォーマンス（チャー、ドゥーシャク、ダジャイーラック）で演奏される太鼓（ダオ、ワッチ）は用いない

太鼓を鳴らすと、バリマイン神が嫌うという

静かにひっそりと息を詰めて過ごす（歌はOK）

▼最近はチョウモス以外の時期にも歌うことも多くなってきた

- テープレコーダーの普及
- テレビ番組の取材

●チョウモスの歌の旋律

▼A. 祈り歌

歌で祈る

大人たちが集まって輪を作り、独唱と合唱をくりかえしていく

旋律は、非常にゆっくり

歌の内容は神を讃えたり、幸福や安全、健康、繁栄を祈願するもの

【聖なるネズっ子よ】(聖なるネズっ子よ、チョウモスに思いを馳せ、健康をもたらせ)



【シェイ】(シェイよ、祭りをもちらせ、シェイよ)



【角なし仔羊】(角なし仔羊よ、シャーワラ牧場の草を食んで、降臨せよ)



【ビドラカレン】(そなたの山羊、見事なりし ビドラカレン、降臨せし)



▼B. 手拍子歌

子供たちが5～6人の小さいグループをつくり、それぞれのグループで手拍子をとってくるくるまわりながらうたう

旋律は軽快な短いフレーズで、何度もくりかえして合唱される

歌詞は、悪口や性的内容をうたった遊び歌で、宗教的な意味はあまりない

【サラザーリの歌】(ここにこないならそれでもいいさ 俺たちやゆっくり終わらせよう 双子のサラザーリを)



【チュタツク】(やっちゃえ、やっちゃえ、マドラックでやっちゃえ)



【ラワックピークの歌】(グジュールの奴はベテンをかけに出かけたよ ザリンの父ちゃんは飴を買いに出かけたよ)



▼C. 踊り歌

祈り歌の合間に歌われる

祈り歌をうたう人々の輪のなかに踊り手が数人入って踊る

軽快な短い旋律を繰り返して、歌うことよりも、踊ることが主体となっている

歌詞は祈り歌の一部を繰り返したり、神話的故事を歌ったものが多い

【角なし仔羊】(角なし仔羊、お前を突つつく)



●チョウモスの歌の旋律型

▼用いられる音の数や音の動きの特徴から、9種類に分類できる



▼旋律型と聖性との関係

音の数が少なく、音と音の高さの間隔が少ないものほど、“聖性の高い儀礼”で用いられる（聖性が高くなるにつれて、音程差の狭い歌が多く歌われるようになる）

逆に音の数が増え、旋律の動きが大きくなればなるほど“俗”、あるいは“穢れ”の要素が大きな行事で用いられる

カラーシャは単に歌詞の内容からでなく、“音そのもの”に聖／俗を感じている

カラーシャは、すべての事象を「聖／俗」という二極を結ぶ線上に置いて考えているが、旋律においても同様の直線的な観念が投影されている（旋律としてようやく成立する短2度の音程に、カラーシャは聖性を感じているのかもしれない）

●チョウモス祭の構造と旋律型との相関

▼聖性の推移

祭りの経過とともに聖性が高まり、クライマックスを迎える

じりじり高まるのではなく、移行期をはさんで階段状に推移していく

村に、外の世界から、神々（客人・異人・まれびと）がやってくる

神迎えの儀礼を実施して神を迎え、お供えを会食する

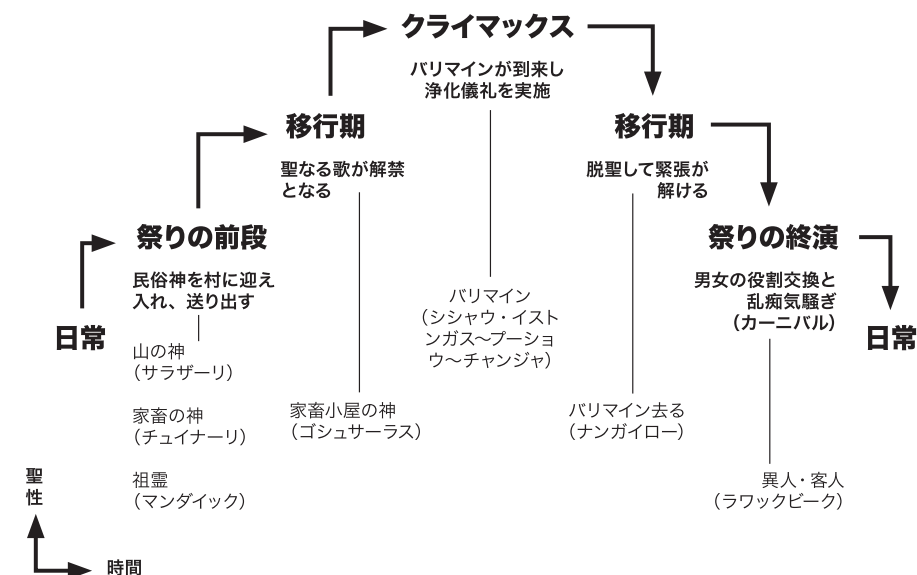
神は、村（日常）に外の要素をもたらす → そして豊饒がやってくる

村に迎え入れた神は、やがては去ってもらわねばならない

神送りの儀礼をして帰っていただく

最後はカーニバルとなり、一気に混沌が出現する

祭りの終焉（神が去ったこと）を強く印象づける



1. 短2度型			◎
2. 短2度+短3度	◎	◎	◎
3. 短2度+長3度型	○	○	◎
4. 長2度型	○		
5. 短2度+長2度型	◎	◎	◎
6. 長2度+短2度型		◎	◎
7. 長3度型	○		○
8. 長2度+長2度型	◎		○ ◎
9. 6音旋律			◎

●「祭り」と「儀礼」「儀式」との関係

▼文化人類学者・青木保の定義

儀礼……「神と人との交渉」を具現する行為

「超越的なもの」との関係を示す象徴的・形式的行為

儀式……日常的な式や礼といわれるものに端的に示される象徴的・形式的行為

両者を統合した上位概念としても「儀礼」を用いる

●「祭り」というものの特質

▼エドマンド・リーチの指摘（『文化とコミュニケーション』）

儀礼の二分的展開

厳格なる形式性……チョウモス祭のプーショウ、チャンジャ

逸脱した乱痴気騒ぎ……チュタック、ラワックピーク

▼ファン・ヘネップの指摘（『通過儀礼』）

「通過儀礼」の三局面説

分離期……サラザーリ、チュイナーリ、マンダイック

過渡期……イストンガス、シシャウ、プーショウ、チャンジャ

統合期……ナンガイロー、ラワックピーク

▼ヴィクター・ターナー（『儀礼の過程』）

儀礼の3段階説

日常世界からの「分離」

どっちつかずの「境界状態」

再び日常世界への「再統合」

儀礼や祭りに見られる3つの重要なキーワード

リミナリティ＝Liminality

コミュニタス＝Comunitas

カタルシス＝Catharsis

▼リミナリティとコミュニタス、そしてカタルシス

「リミナリティ」……どっちつかずの状態（“境界領域”）

例：男でもない、女でもない

“仮死”状態、“無所有”の状態

→サラザーリ、チュイナーリ、マンダイック

→ゴシュニック、プーショウ、チャンジャ（イドレイン）

「コミュニタス」……社会の枠組みから外れた一時的な“無所属状態”

穢れ、死、解体、破壊などの“否定的シンボル”が出現

価値観（役割）が逆転する（“役割転倒”）

→サラザーリ、チュイナーリ、タトレック、マンダイック

→グローニャック、チャンジャ、ナンガイロー、ラワックピーク

日常生活における“属性を剥奪”されて、社会的・文化的な分類から外される

法や伝統、慣習などの枠外に置かれる

→チュイナーリ、マンダイック、ラワックピーク

「カタルシス」……抑圧からの“解放”、苦悩の“浄化”

鬱積したものを吐き出して、気分（心・肉体）がよくなる

浄化されることで、社会の動的均衡が維持される

→ドライコット、タトレック、マンダイックラット

→ナンガイロー、アマタクサーラス、ラワックピーク

●「日常」と「祭り」の関係

▼祭りは「再生」のためにおこなわれる

だらだらした日常が続くと、社会が倦んでくる

→弾みが見つからないと、なかなか日常から脱却できない

祭りによって、社会（人）はいったん解体される（一時的な“死”）

→そして、新しく生まれ変わる（“再生”する）